

「当たり前」の継承

～千里ニュータウンにおけるアーカイブ・プロジェクトの試み～

大阪大学大学院 特任研究員
千里ニュータウン研究・情報センター 田 中 康 裕

1. 日本で最初の大規模ニュータウン

千里ニュータウンは、戦後の高度経済成長期に生じた都市への人口集中と、それに伴う都市周辺のスプロール的な開発に対して、良好な住環境を備えた住宅を大量に供給するために開発された(表-1)。1962年から入居が始まり、2012年にまちびらきから50年を迎えた。計画にあたってはクラレンス・A・ペリーの近隣住区論(参考文献1)がベースとされ、吹田市域の8住区、豊中市域の4住区、計12住区から構成されるニュータウンである(図-1)。

まちびらき当初、千里ニュータウンに入居したのは若い夫婦とその子どもが中心だった。それから半世紀が経過しているが、当初から千里に住み続けている人は多い。例えば、豊中市域の新千里東町¹⁾の人口構成みると(図-2)、1970年時点では30代とその子ども世代の割合が



図-1 千里ニュータウンの12住区

※吹田市域は○○台、豊中市域は新千里○町という住区名がつけられている。上新田、弘済院は計画から除外された地域である。

表-1 千里ニュータウンの概要

入居開始	1962(昭和37)年9月15日
開発主体	大阪府企業局
計画人口	15万人
計画住戸数	3万7,330戸
現在の人口	92,109人
現在の世帯数	42,460世帯
開発面積	1,160ha(吹田市域791ha・豊中市域369ha)
位置	大阪都心から北へ約15km

※現在の人口・世帯数は、2012年春時点での吹田市域4住区、豊中市域8住区を合計した人口・世帯数であり、住民基本台帳による。

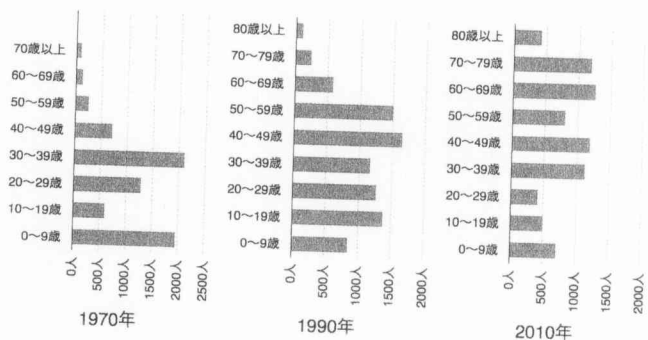


図-2 新千里東町の人口構成の変化

※国勢調査における東丘小学校校区の人口をもとに作成。

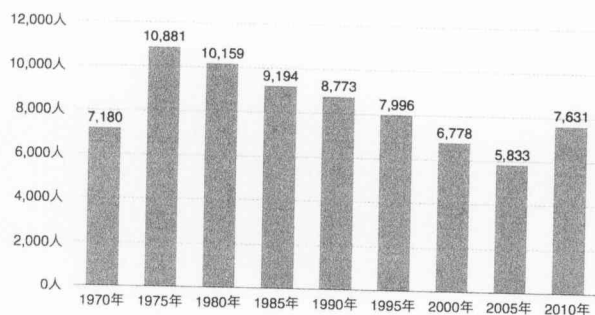


図-3 新千里東町の人口推移

※国勢調査における東丘小学校区の人口をもとに作成。

大きいことがわかる。そして、40年後の2010年時点でも、70代の方は多く、千里に住み続ける親元への帰省によって、お盆や年末年始には区内の車が一時的に増加するという現象も見られる。このように千里ニュータウンは既に帰省先となっているが、その風景は近年の再開発によって急速に変化しつつある。新千里東町でも集合住宅が相次いで建て替えられ、減少し続けていた人口が再び増加に転じている(図-3)。

半世紀前の開発によって、千里丘陵の風景は一変し、人工的な街が生み出された。その街の風景は、近年の再開発によって再び変わりつつある。このような街、千里ニュータウンにおける継承とは何を意味するのか。本稿では筆者が参加する「千里グッツの会」が行ってきたいくつかの活動を、アーカイブ²⁾という観点から読み直すことで、この大きな課題を考えるための糸口を見つきたい。

2. 絵葉書が記録する風景の変化

「千里グッツの会」は、新千里東町のコミュニティ・カフェ「ひがしまち街角広場」³⁾を拠点として活動するグループで、地域の住民、建築・都市計画の専門家、大阪大学の教員・学生が参加している。「千里ニュータウンにはお土産がない」、「魅力ある街には魅力ある絵葉書がある」というアイデアから、風景写真、集合

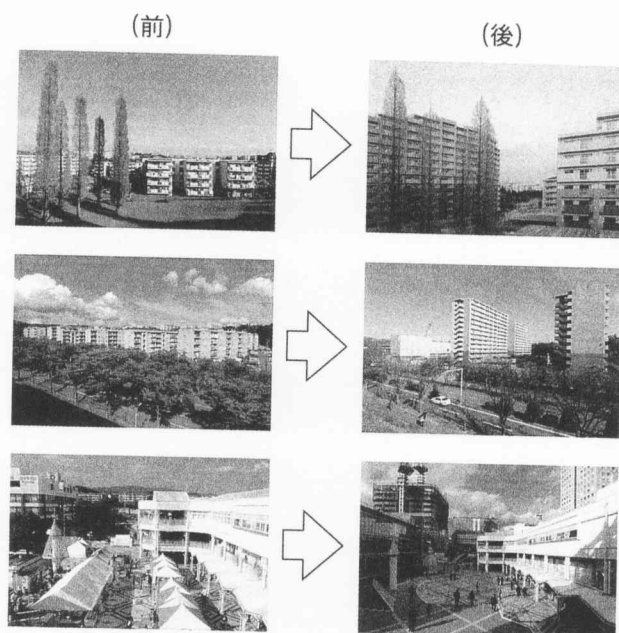


図-4 千里ニュータウンの変化

※左側は絵葉書のために撮影した写真。

住宅の住棟図面、千里ニュータウンの調査結果等を素材として絵葉書作りの活動をスタートさせた(参考文献5)⁴⁾。グループの発足は2002年。筆者も2004年から参加し、絵葉書の素材とするため千里ニュータウン内の写真を撮り歩くようになった。当初は桜や紅葉など季節の写真を撮影していたが、ちょうど再開発が行われる時期と重なっていたため、建て替え前の団地も撮影するようになり、結果として、もう2度と撮影できない写真を多数残すことができた(図-4)。こうした経験を通じて、次第にニュータウンの歴史を残すことについて考えるようになった。

3. ニュータウンの展示

2006年4月22日から6月4日まで、吹田市立博物館で春季特別展「千里ニュータウン展-ひと・まち・くらし-」が開催され、千里ニュータウンの計画理念、住民活動の歴史などを説明する展示パネル、簡易型ユニットバス、軽三輪自動車などが展示された。また、まちびらき当

時の暮らしを団地の一室に再現するサテライト展示、講演会やトークショー、街歩きなどのイベントも多数行われた。この特別展は市民実行委員によって企画・運営されたものであるが、「千里グッズの会」からも何名かが市民実行委員として参加している。

吹田市立博物館での特別展が好評であったことを受け、「千里グッズの会」のメンバーが中心となって市民実行委員を立ち上げ、同年9月1日から9月22日に千里公民館で「千里ニュータウン展@せんちゅう」を開催することになった。千里公民館内での展示に加え(写真-1)、工事中の仮設通路には各年代の航空写真を展示した(写真-2)。また、ニュータウン開発から除外されたため、開発前の街並みや暮らしが



写真-1 「千里ニュータウン@せんちゅう」の展示会場

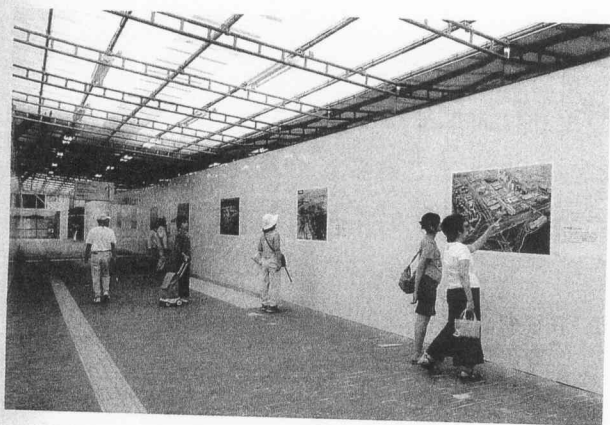


写真-2 「千里ニュータウン@せんちゅう」の仮設通路ギャラリー

※展示会では仮設通路を利用して航空写真を展示。

残されている上新田地区(図-1)に焦点をあてたサテライト展示や講演会も行った。

そして、2012年10月13日から11月25日には、千里ニュータウンのまちびらき50年事業の関連イベントとして、吹田市立博物館で秋季特別展「ニュータウン半世紀展-千里発・DREAM-」が開催された。この特別展においても、市民実行委員が企画・運営に関わっている。

このように、2006年以降、千里ニュータウンをテーマとするいくつかの展示会が開催されてきたが、その意義として次の点をあげることができる。

まず、歴史がない街だとみなされがちであったニュータウンが博物館の展示テーマとして取り上げられたことである。計画された街における暮らしを含め、千里ニュータウンが歴史の対象とみなされたことの意義は大きい。

次に、千里ニュータウンを対象とする展示会において、上新田の暮らしも取り上げられたことである。開発者の視点から見れば上新田は計画除外地だが、2006年に開催された2つの展示会では、上新田がニュータウン開発前の暮らしが継続する地域として捉えられた。ニュータウン開発を挟んだ暮らしの連続性という視点から、千里丘陵が捉え直されたことには意義がある⁵⁾。

最後に、市民実行委員が展示の企画・運営に参加することで、開かれた公共施設が実現したことである⁶⁾。まちびらきから半世紀しか経過していない千里ニュータウンでは、歴史とは遠い過去にあるものではなく、住民自らが経験してきた暮らしが歴史になるため、展示の企画・運営に住民が参加しやすかったのではないかと考えることができる。

4. ニュータウンでの暮らしの思い出

「千里グッツの会」は、2011年度から豊中市との協働事業として「ディスカバー千里」プロジェクトを行っている。ディスカバー(Discover)とは「発見する」の意味。住民や訪問者に、千里ニュータウンの魅力を発見してもらえるよう、暮らしの情報や歴史を収集、編集、発信することを目指すプロジェクトである。このプロジェクトは「暮らしの歴史アーカイブ事業」、「ウェルカム・パック事業」の2つからなり⁷⁾、前者の「暮らしの歴史アーカイブ事業」ではインタビューやカードによって思い出を収集したり(図-5、6)、昔の写真(写真-3)



写真-3 雪の日の千里ニュータウン

※新千里東町の方から寄贈いただいた写真。雪の日、公園まで竹を伐りに行き、スキーを作って子どもを遊ばせた光景が撮影された貴重な写真。1970年頃に撮影されたもの。

やパンフレット等の資料を収集し、これらをイベント会場での展示やウェブサイトへの掲載によって共有する活動を進めている。

「ディスカバー千里」プロジェクトは、「いにしえ街歩き東町昔遊びツアー」と名づけられたユニークな街歩きツアーを生むという、当初予想していなかった方向にも展開していくことになる。新千里東町では、2001年から、小学生の子どもを持つ父親たちの集まりである「東丘ダデイズクラブ」が活動を行っている。月に1度、週末の夜に「ひがしまち街角広場」で定例会を開いて親睦、情報交換を図ったり、小学生を対象とするバーベキュー、キャンプファイヤー、住区の夏祭りへの出展を行ったりするなど非常に多彩な活動を行うグループである。「東丘ダデイズクラブ」には、子ども時代を千里ニュータウンで過ごしたメンバーが何名かいるため、「ディスカバー千里」プロジェクトの一貫として、子ども時代の遊びについてインタビューを行った。インタビューを進める中で、自分たちがかつて経験した遊びを、今の子どもたちにも体験して欲しいと話が盛り上がり、2011年11月20日に街歩きツアーが実現されることとなった。子どもたちに昔の遊びや暮らしを伝え

- 大阪市からこの街にやってきました。来た当初は山ばかり!! 田舎だなあと思いながら来たけど、開発スピードがとてはやく、朝竹やぶだったところが、夜帰ってくると平地になってたり。道も舗装されてなくて、ドロコ道で、朝バス停まで、長くついでいて、バス停で普通のくつにはきかえて、出かけていた。(女性/70代)
- 小学生のころ、社会の教科書で千里ニュータウンを知り、いつか住めることを願ってきました。念願かなって2年前から暮らしています。千里ニュータウンでの思い出は、これから作ります!(女性/30代)
- 高校を卒業し神戸から出てきて20年程ですが、初めは「大阪でゴミゴミした街」というイメージを見事に裏切ってくれて以来、ずっとすんでいます。南千里辺りは、最近変わってしまいました。それでも千里かいわいは「私のホームタウン」です。(男性)
- 40数年前はじめて千里ニュータウンに来たとき展望台に登りました。新しい街がとても美しく、子供の私には夢の町のようなものでした。それから少しして千里ニュータウンに引越してきました。(女性/50代)

図-5 思い出カードに記載された思い出



図-6 集合住宅に住む子どもの忘れ物

※忘れ物を上から投げ渡していたという思い出をイラストにしたもの(イラスト:小松莉果)。

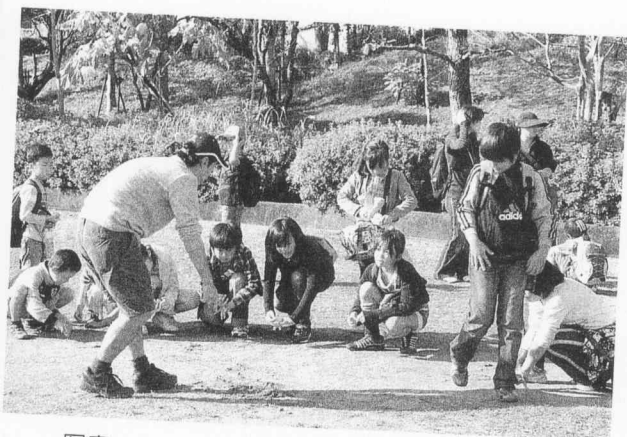


写真-4 いにしえ街歩き東町昔遊びツアー

※子どもの服装に扮した「東丘ダディースクラブ」メンバーにビー弾を教えてもらう子どもたち（撮影：鈴木毅）。



写真-5 いにしえ街歩き東町昔遊びツアー

※「大きな本」を使って、子どもたちに地域の情報や歴史を紹介（撮影：鈴木毅）。

るため、子どもの服装に扮した「東丘ダディースクラブ」メンバーが、ビー弾や缶蹴り等の昔遊びを教えたり（写真-4）、忘れ物を集合住宅から投げ渡すシーン（図-6）を再現したりと、子どもも大人も楽しめるツアーとなった。

このように、住民にとっては「当たり前」のものとして経験されてきた暮らしが、次の世代へと継承する価値がある歴史になるという意識を、住民と共有できたことが「ディスカバー千里」の大きな意義であり、2013年度も豊中市との協働事業としてプロジェクトを継続している⁸⁾。

5. 思い出を喚起・共有するメディア

「いにしえ街歩き東町昔遊びツアー」のために、「大阪大学建築・都市計画論領域」のメンバーによって作成されたのが「大きな本」である（参考文献10）。幅1,260mm、高さ1,800mmの大きさのページに新千里東町の地図、昔の写真、インタビューで収集したエピソードなどを掲載し、街歩きツアーのいくつかのポイントで「大きな本」を使って地域の情報や歴史を紹介した（写真-5）。

2012年、「千里グッズの会+大阪大学建築・都市計画論領域」による「大きな本」のプロジ

ェクトが、「おおさかカンヴァス2012」の作品に選出されたため、新たに8冊の「大きな本」を制作した。新たに制作した「大きな本」には、千里ニュータウンの計画理念、おすすめの街歩きコース、子どもの遊び場の変化、昔の写真など、これまでの活動を通じて収集してきた情報や歴史を掲載し（図-7）、これらを用いてい

- 『大きな本～人がまちを読む風景～』（8頁）
 - ・「大きな本」のコンセプト、作り方などを記載した説明書（コンセプトブック）。
- 『都市の歩き方：千里』（12頁）
 - ・千里ニュータウンの計画理念、年表、おすすめのまち歩きコースなどを紹介。
- 『ひがしまち街角広場 2001-2012』（8頁）
 - ・「ひがしまち街角広場」の11年の歩みを振り返り、これからの運営を考えるためのワークショップで利用。
- 『千里のみんなでつくった大きな本』（8頁）
 - ・千里の思い出の場所、千里に欲しい場所、千里を楽しい街にするためのアイデアについて意見交換するためのワークショップで利用。
- 『こどもたちにとってのひがしまち』（6頁）
 - ・東丘小学校に通う子どもと、父親世代への調査結果をもとに、新千里東町の今と昔の遊びを紹介。
- 『車止図鑑』（6頁）
 - ・新千里北町に点在するアート作品のような車止を紹介。
- 『大きな本 新千里東町編』（12頁）
 - ・新千里東町の地図と昔の写真、府営新千里東住宅における住まい方の変遷などを掲載。
- 『千里今昔』（8頁）
 - ・開発前の地形図、千里ニュータウンの計画地図、昔の写真などを掲載。

図-7 「大きな本」のラインナップ

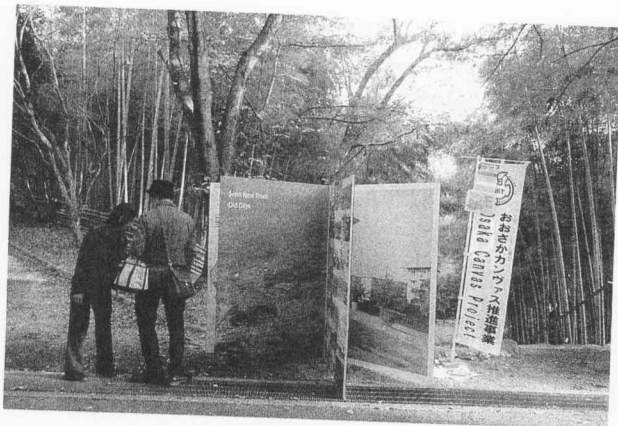


写真-6 「大きな本」を使ったツアー

※新千里東町の住区内のいくつかのポイントに「大きな本」を展示。



写真-7 「大きな本」を使ったツアー

※簡易型ユニットバスが残されていた住戸を開放し、利用経験のある地域住民（写真右の女性）に使い方などを説明していただいた。

いくつかのツアー、ワークショップを行った。

2012年10月26日と11月10日にはオリエンテーリング形式のツアーを開催した。ツアーでは、新千里東町の数カ所に「大きな本」を展示するとともに（写真-6）、建替えが予定されている府営新千里東住宅の住戸、及び、簡易型ユニットバスが当時のままの状態に残されている要員住宅の住戸を見学場所として開放した⁹⁾。要員住宅では住民にも協力いただき、簡易型ユニットバスをどのように使っていたかという貴重な話を聞かせていただくことができた（写真-7）。2012年11月18日には、「東丘ダディーズク

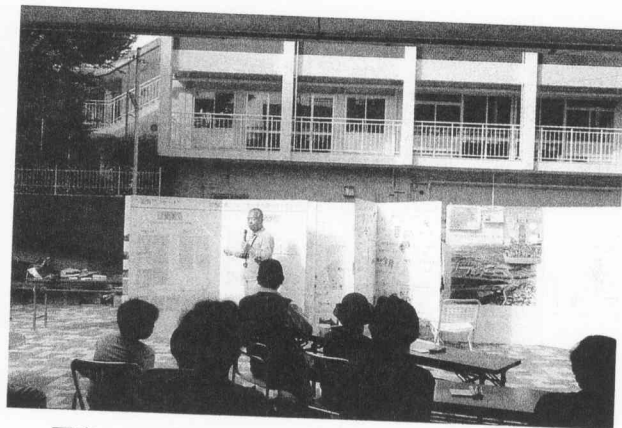


写真-8 「大きな本」を使ったワークショップ

※「ひがしまち街角広場」の周年記念行事にて、「大きな本」を用いて、これまでの歩みを振り返り、これからの運営について意見交換するためのワークショップを行った。

ラブ」主催で「いにしえ街歩き東町昔遊びツアー 第二弾」が開催され、前年と同様「大きな本」を使って地域の情報や歴史を紹介した。

「ひがしまち街角広場」と「千里文化センター・コラボ」では、それぞれ2012年10月7日と10月26日にワークショップを開催した（写真-8）。これまでの思い出を共有し、これからの運営のあり方、暮らしを考えるきっかけとするため、「大きな本」には昔の写真や寄せられた思い出、意見を掲載した。

これらのツアーやワークショップを重ねる中で、「大きな本」は、その大きさゆえ、みなで読める、自身の思い出や感想を書き込んだり貼り付けたりできる、それをまた他の人が読めるというように、多様な関わり方を許容することが明らかとなってきた。また、複数冊を並べて展示することで、いつもの空間をミュージアムのように変える効果があることも確認できた（写真-9）。

先に触れたように、まちびらきから半世紀しか経過していない千里ニュータウンでは、歴史とは遠い過去にあるものではなく、住民自らが経験してきた暮らしが歴史となる。自らの暮らしとは「当たり前」の経験であるため、何らか

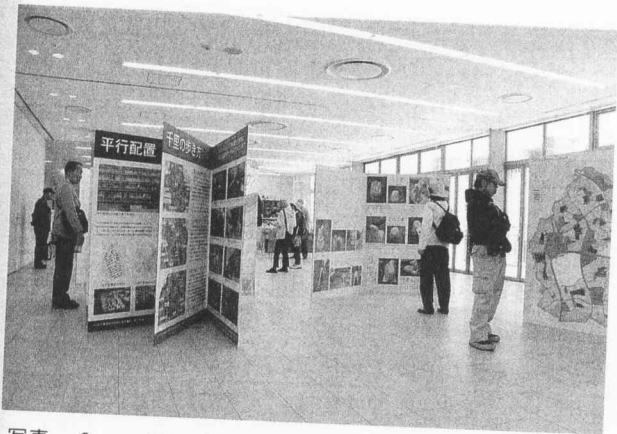


写真-9 一同に会して展示された8冊の「大きな本」

※千里文化センター・コラボ、2階多目的ホールに展示
(写真：鈴木毅)。



写真-10 「大きな本」から始まる思い出話

※「大きな本」に掲載された昔の写真を見て、思い出話を始めた「東丘ダイーズクラブ」のメンバー。

のきっかけがないと意識して思い出すことがない。ここに「大きな本」の意味がある。即ち、「大きな本」をみなで読むことで、思い出話が始まったり(写真-10)、他者によって書き込まれ、貼り付けられた思い出がきっかけになって自らの思い出が蘇ったりするのである。「大きな本」とは地域の情報や歴史を伝えるメディアであると同時に、思い出を喚起し共有するメディアでもあると言える。

6. まとめ 「当たり前」の継承

千里ニュータウンでの活動を通して気づかされたことは、現在の「当たり前」、自身にとっての「当たり前」は、次世代へと継承するに値する歴史になるということである。ここで言う「当たり前」とは、例えば、公園でビー弾をして遊んだり(写真-4)、忘れ物を上から投げ渡してもらったりした思い出であり(図-6)、簡易型ユニットバスにまつわる思い出である(写真-7)。これらは「千里グッズの会」が実施した街歩きツアーにおいて、他者へと、子どもたちへと継承することが試みられたことは本稿でみてきた通りである。しかし、これも本稿で述べた通り、自らが経験した「当たり前」は何らかのきっかけがないと思い出されない。ここに、何らかのきっかけを工夫する余地がある。

ニュータウン開発前から続く千里丘陵での暮らしもあれば、ニュータウン開発後の半世紀の暮らしもある千里ニュータウンには、まだ意識されていないが継承すべき「当たり前」が無数に存在するはずである。この街は、何を継承するかではなく、どうやって継承するかを問う段階にきている。「千里グッズの会」が取り組んできた絵葉書、「ディスカバー千里」、「大きな本」などのプロジェクトは、どうやって「当たり前」を継承するのかという問いに対する具体的な提案である。

謝辞

本稿は「千里グッズの会」メンバーの皆様、特に太田博一氏、鈴木毅氏と行ってきた活動と度重なる議論が下敷きとなっています。皆様に感謝の意を表します。

注

- 1) 新千里東町は千里ニュータウンの中で唯一、全戸が分譲・賃貸の集合住宅からなる住区である。入居開始は1966年。
- 2) アーカイブとは「個人や組織が作成した記録や資料を、組織的に収集し保存したもの。また、その施設や機関。」(参考文献2)の意味。
- 3) 近隣センターの空店舗を活用して、2001年9月30日に開かれた場所。詳細は参考文献3、4を参照。
- 4) 「千里グッズの会」の活動は以下も参照。
<http://senri.xii.jp/newtown-sketch/goods>
- 5) 実際、千里ニュータウンの暮らしにおいて、上新田は無視できず、例えば上新田の神社や竹林は千里ニュータウンの住民にとっても重要な場所になっている。また、参考文献6では、ニュータウン開発前に存在した道・水路・ため池を読み取ることで、その名残がニュータウン内に見られることが明らかにされている。
- 6) 2006年当時、吹田市立博物館の館長だった小山は「この「市民に開かれた博物館」が、低迷する日本の博物館への一石となる予感をおぼえる。」と述べている(参考文献7)。
- 7) 「ディスカバー千里」の活動は以下を参照。
<http://discover-senri.jimdo.com/>。「ウェルカム・バック」は、千里ニュータウンの暮らしの情報や歴史をパッケージにまとめたもので、現在は千里ニュータウンへの転入者へ配布している。
- 8) 活動の成果は研究論文としてもまとめている(参考文献8、9)。
- 9) 要員住宅とは「千里ニュータウン内に職場を持つ人達に賃貸する住宅」(参考文献11)のこと。新千里東町近隣センターの要員住宅は既に閉鎖されているが、大阪府の協力によりツアーの2日間のみ開放が実現できた。

参考文献

- 1) クラレンス・A・ペリー(倉田和四生訳)『近隣住区論』鹿島出版会 1975年
- 2) 『「外来語」言い換え提案』国立国語研究所「外来語」委員会 2006年
- 3) 日本建築学会編『まちの居場所』東洋書店 2010年
- 4) 田中康裕ほか「日々の実践としての場所のしつらえに関する考察－「ひがしまち街角広場」を対象として－」・『日本建築学会計画系論文集』No.620 pp.103-110 2007年10月
- 5) 鈴木毅ほか「千里ニュータウンのための地域絵葉書の開発」・『日本建築学会技術報告集』Vol.19 No.41 pp261-264 2013年2月
- 6) 河畑淳司ほか「千里ニュータウン計画除外地区における住環境変容に関する研究：その3 旧集落における社会空間関係の分析」・『日本建築学会近畿支部研究報告集』pp.249-252 2002年5月
- 7) 市民委員会編『千里ニュータウン展 ひと・まち・くらし』吹田市立博物館 2006年
- 8) 栗本絢子ほか「千里ニュータウン新千里東町における暮らしの記憶と住環境の経年変化に関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集』2012年6月
- 9) 小松莉果ほか「千里ニュータウン・新千里東町における子どもの遊び場と行動パターンに関する研究－建替え後の実態と世代間比較－」・『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)』E分冊 pp.1339-1340 2012年9月
- 10) 下林信夫ほか「都市における出来事のデザイン手法に関する考察」・『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)』E分冊 pp.1115-1116 2012年9月
- 11) 『財団法人千里開発センター10年のあゆみ』千里開発センター 1972年

